日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing

Images of elderly people with dementia among high school students

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-10-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: KIMURA, Hiromi, KOGA, Kayoko, NISHIO, Midori メールアドレス: 所属:
URL	https://jrckicn.repo.nii.ac.jp/records/800

本誌に掲載された論文の著作権は，一般社団法人日本認知症ケア学会に帰属します．
https://ninchisyoucare.com/gakkaishi/gakkaishi/kitei.htm

★ 研究報告 ★

高校生における認知症高齢者のイメージ

木村裕美，古賀佳代子，西尾美登里

抄録

高校生の認知症高齢者イメージを明らかにすることを目的とした．高校1年生に質問紙調査を実施した．質問内容は基本属性，祖父母との同居，認知症高齢者と接した経験である．認知症高齢者のイメージを自由筆記による文章で回答を得た．解析は，テキストマイニングのソフトウェアKH Coderを用いた．本研究は，C大学の倫理委員会の承認を受けた．対象者に研究の趣旨と内容を説明し，データは個人情報の漏洩に注意した．本研究の結果，対象者は199人(男性77人，女性122人)であった．抽出単語は，「忘れる，もの忘れ，大変，記憶，病気」が頻出語であった．クラスター分析では，5つのクラスターが抽出された．高校生の認知症高齢者イメージは，「脳機能の障害で記憶力が低下し，介護が必要で大変な病気である」などが明らかになった．認知症高齢者と接する体験でイメージを変化させる可能性があると思われ，支援の必要性を考える機会となりうるとも考えられた．

Key Words：高校生，認知症高齢者のイメージ，負のイメージ

日本認知症ケア学会誌，19(2)419-426，2020

Ⅰ．緒　言

2018年のわが国の年齢3区分別の人口構成割合は年少人口は12.2%，生産年齢人口は59.7%，老年人口は28.1%であり[1]，年少人口および生産年齢人口は年々減少し，老年人口は増加し続けている．世帯構成は3世代同居が減少し，高齢者夫婦のみ世帯や単身世帯の割合が増加している[2]．

平均余命が延伸するなか認知症高齢者数も増加し続け，2012年時点で462万人であり，10年後の2025年には700万人を超えると推測[3]される．これらに対応すべく厚生労働省は，2015年に「認知症施策推進総合戦略；認知症高齢者等にやさしい地域づくりに向けて(新オレンジプラン)」[2]を策定した．65歳以上の4人に1人が認知症およびその予備軍で，約10年後には1.5倍に増加する見通しである[1]．このような将来に，まさに生産年齢人口の若手世代となり，社会を牽引する役割である高校生が認知症高齢者への理解を深め共に生きる社会をつくる取り組みの準備は重要であると考える．

先行研究において，中学生・高校生を対象とした認知症に関する調査[4]によると，6割以上の人が認知症という言葉を知っていたものの，「自分には関係がない」「認知症は精神的なものが原因である」「認知症は負のイメージがある」など，病気であることや症状，対応方法について正しい理解の不足が認められた．小山ら[5]の研究では，高齢者は認知機能低下や日常生活動作(Activities of Daily Living；ADL)低下，手段的日常生活動作(Instrumental Activities of Daily Living；IADL)低下が生じることを中学生はイメージしにくいと述べている．大学生を対象にした島崎ら[6]の研究では，認知症高齢者との同居の有無でイメージに有意な差はなく，認知症についての症状や病気についての知識の多くはマスメディアなどから得ていたと報告している．金[7]は，一般住民を対象とした調査で，認知症の知識が乏しく漠然とした不安感を抱き，否定的なイメージや拒否的な態度と偏

受付日　2019.02.18／受理　2020.02.12
Hiromi Kimura，Kayoko Koga，Midori Nishio：福岡大学医学部
〒841-0180　福岡県福岡市城南区七隈7-45-1

見は根強く，当事者や家族を苦しめていると述べている．一般社会は依然として理解不足で病気であるという認識がなく，認知症高齢者は偏見にさらされていると指摘している[8]．そこで，正しい知識をもつことで偏見は軽減され，肯定的なイメージへと変化し認知症高齢者への支援に前向きになる風潮を生み出すと考えられる[9]．

平均余命が延伸し核家族化がますます進む状況で，認知症高齢者であっても住み慣れた地域でその人らしい生活を継続可能にするためには，社会背景を踏まえ若年層から認知症の正しい知識を学び理解を深め，だれもが支援の手を差し伸べられることは必須である．認知症高齢者のイメージに関する研究は，対象が小・中学生や大学生，一般住民に関するものは認められるが，高校生に焦点を当て，自由筆記による質的データから検討した報告は少ない．本研究は，高校生の認知症高齢者に対するイメージに関しての基礎的データとなり，導き出される結果は有意義であると思われる．そこで，認知症に関する知識やかかわり方の教育が可能であると考えられる高校生を対象に，認知症高齢者のイメージを明らかにし，認知症高齢者への理解と支援のあり方について検討した．

Ⅱ．研究方法

1．対　　象

A市の公立B高等学校に在籍している普通科1年生224人にアンケート調査票を配布し，調査協力の同意が得られた199人(男性77人，女性122人)を有効回答として分析対象とした(回答率88.8％)．A市は中核市であることや，高校1年生は学習指導要領において「総合的な学習の時間」が実施されていることから，本研究の結果を生かすことができると考えた．

2．方　　法

調査は，無記名留め置きによる自記式質問紙を行った．内容は，基本属性(年齢，性別，祖父母との同居状況，高齢者とのふれ合い経験の有無，認知症高齢者と接した経験の有無，高齢者に関する授業や講演受講状況)，認知症高齢者のイメージは自由筆記で回答を得た．

3．解析方法

認知症高齢者のイメージの自由筆記を繰り返し精読し，主旨と文脈を把握した．次に，認知症高齢者のイメージと思われる部分をテキストデータに変換した．テキストマイニングソフトであるKH Coder[10]を用いて，計量テキスト分析を行い可視化した．計量テキスト分析とは[10]，質的データのコーディングによって数値化し，計量的分析手法を適用してデータを整理，分析，理解する方法である．KH Coderは，研究者の恣意的な分析を排除し，客観的に内容を分析する信頼性のあるツールである．データ処理は，第1段階では自動抽出した語を用いて，恣意的になりうる操作を極力避けつつデータの様子を探る．第2段階では主体的かつ明示的に，データのなかからコンセプトを取り出し分析を深める．

解析手法は，上位頻出語と階層的クラスター分析を用いた．上位頻出語は，第1段階のデータ処理から語を自動的に抽出し，さらに頻回に使われている上位150語を抽出し，頻出回数の全体を把握することができる．階層的クラスター分析は，デフォルトのward法によるクラスター分析を実施した．第1段階を経て第2段階でコーディングルールを作成し，コード間の結びつきを探る．いくつかの成分を階層的に抽出し，抽出された語をコード化することができる．階層クラスター分析は，テキストデータをクラスターに分類するだけでなく，クラスターが結合されていく過程までを確認することができる．デンドログラムは，図上で距離の短いところで結合するほど近い関係にある[10]．これらにより，本研究の質的データを上位頻出語および階層的クラスター分析することは妥当であると考えた．さらに，分析結果に矛盾点や問題点がなく現象を適切に表しているかを比較検

表 1　基本属性　　人数(%)

	男性	女性	全体
平均年齢	15.7歳	15.8歳	15.6歳
	SD 0.51	SD 0.48	SD 0.50
性別	77(38.7)	122(61.3)	199(100.0)
祖父母との同居			
あり	18(23.4)	44(36.1)	62(31.2)
なし	59(76.6)	78(63.9)	137(68.8)
高齢者とのふれ合い経験			
あり	77(100.0)	119(97.5)	196(98.5)
なし	0(0.0)	3(2.5)	3(1.5)
認知症高齢者と接した経験			
あり	3(3.9)	5(4.1)	8(4.0)
なし	74(96.1)	117(95.9)	191(96.0)
高齢者に関する授業や講義の受講経験の有無			
あり	47(61.0)	73(59.8)	120(60.3)
なし	30(39.0)	49(40.2)	79(39.7)

討し，総合的に判断した．また，スーパーバイザーからの意見を求め，データの信頼性と妥当性の確保に努めた．

4．倫理的配慮

本研究は，C大学の倫理委員会の承認を受け実施した．対象者の所属する高等学校の最高責任者の承認を得て，対象者に研究の趣旨と内容，参加は自由意志で不参加でも不利益にならないことを書面と口頭で十分に説明した．データは個人情報の漏洩に注意し，プライバシー保護に十分注意した．本研究の利益相反はない．

Ⅲ．結　　果

1．基本属性

対象者は男性77人(38.7%)，女性122人(61.3%)で，合計199人であった．平均年齢は15.6歳(SD0.50)であった．祖父母との同居がありは62人(31.2%)，高齢者とふれ合ったことがありは196人(98.5%)，認知症の人に接した経験がありは8人(4.0%)，高齢者に関する授業や講義を受けたことがある人は120人(60.3%)であった(表1)．

2．認知症高齢者イメージについて

1）頻出語と出現回数

総抽出語数は2,194文字であり，393単語に分割された．多かった抽出単語は，「忘れる」50件，「もの忘れ」38件，「大変」32件，「記憶」20件，「記憶」20件，「ぼけ」14件，「家族」14件，「わかる」14件，「介護」13件，「激しい」13件，「認知」13件，「思う」12件などであった．そのほか，頻出上位20位までを表2に示す．

2）階層的クラスター分析

認知症高齢者イメージを階層的クラスター分析した結果は，5クラスターが導かれた．個々のクラスターについて概観すると，第1クラスターは，『昔』『思い出せる』『脳』『低下』『障害』などの語句から構成され，“徐々に名前や顔がわからなくなる”“物事を忘れる”などの記載内容から，＜昔のことは覚えているが脳機能が低下する障害である＞と命名した．第2クラスターは，『怖い』『認知』『まわり』『家族』などの語句から構成され，“大変な病気”“家族やまわりの人がつらい”などの記載内容から，＜家族やまわりの人は認知症を怖いと思う＞と命名した．第3クラスターは，『薄れる』『仕方』『進行』『少し』などの語句から構成され，“ひとりで生きていけない”“生活できなくなる”などの

表 2　高校生による認知症高齢者のイメージ頻出語

頻出順位	抽出語	頻度	頻出順位	抽出語	頻度
1	忘れる	50	18	障害	4
2	もの忘れ	38	18	赤ちゃん	4
3	大変	32	18	むずかしい	4
4	人	28	18	物事	4
5	自分	23	18	聞く	4
6	記憶	20	19	感じる	3
7	病気	16	19	行動	3
8	ボケ	14	19	高齢	3
8	家族	14	19	仕方	3
8	わかる	14	19	時間	3
9	介護	13	19	思い出せる	3
9	激しい	13	19	時間	3
9	認知	13	19	知る	3
10	思う	12	19	低下	3
11	多い	11	19	脳	3
12	覚える	10	19	薄れる	3
13	忘れっぽい	8	19	怖い	3
13	治る	8	19	変わる	3
14	いま	7	19	本人	3
15	悲しい	6	19	話	3
16	必要	6	20	わがまま	2
16	進行	6	20	サポート	2
17	イメージ	5	20	過去	2
17	言う	5	20	会話	2
17	まわり	5	20	看護	2
17	昔	5	20	頑固	2
17	名前	5	20	顔	2
17	戻る	5	20	興味	2
18	子ども	4	20	苦手	2
18	少し	4	20	考える	2

記載内容から，＜少しずつ生活の仕方の記憶が薄れ進行する＞と命名した．第4クラスターは，『もの忘れ』『激しい』『介護』『必要』『大変』『病気』などの語句から構成され，“身近にいるとやっかいである”“お世話が大変である”などの記載内容から，＜もの忘れが激しく介護が必要で大変な病気である＞と命名した．第5クラスターは，『高齢者』『赤ちゃん』『戻る』『行動』『変わる』『時間』『時間』『記憶』『忘れる』『悲しい』『感じ』などの語句から構成され，“病気だが忘れてしまうのは悲しい”“だんだん幼くなる”などの記載内容から，＜赤ちゃんのような行動をして名前や物事の記憶を失い悲しい感じがする＞と命名した(図1)．

Ⅳ．考　　察

本研究は，対象とした高校1年生に認知症高齢者のイメージについて自由筆記してもらい，主旨と文脈から認知症高齢者のイメージであると読み取れる部分をすべてテキストデータに変換し，テキストマイニングKH Coderで解析を行った．高校生がもつ認知症高齢者に対するイメージを明らかにすることは，将来社会を担う中心的役割をもつ人の思いや考えを知るうえで有用であると考える．さらに，超高齢社会で増加の一途をたどる認知症高齢者の介護を担うことになるであろうことを推測すると，よりよい共生を目指す方策を検討することは必須であると思われる．

1．基本属性からみた特性

対象は祖父母との同居ありが3割であった．全国の世帯構成[2]の3世代世帯は，1割未満であることと比して高いことが認められた．本対象の高等学校は地方の中核市にあるが，核家族化が都市部よりも拡大していないことが推測される．今回の調査では，A市にあるB高等学校の生徒のみを対象に実施しているが，同市の他校や都市部の高等学校の同学年の調査を実施し，家族背景等を比較検討する必要があると思われる．高齢者に関する授業や講義の受講経験は6割であるが，高齢者とのふれ合いはほぼ全員が経験していた．高齢者とのふれ合いの多くは，自身が身近に感じる高齢者として祖父母とのかかわりである可能性が考えられる．認知症高齢者と接した経験は1割に満たなく，認知症高齢者に関する知識は先行研究[11]でも述べられているように，マスメディアから得ている可能性が推測される．本間[12]は，マスメディアから得た知識は実用的になりにくいことを指摘している．高齢者や認知症についての授業等で加齢に伴う基礎的知識を学ぶことも重要であるが，会話を交わすことや何らかの活動を共にするなどの実体験を通して理解をより深め身近に感じることが大切である[13]．

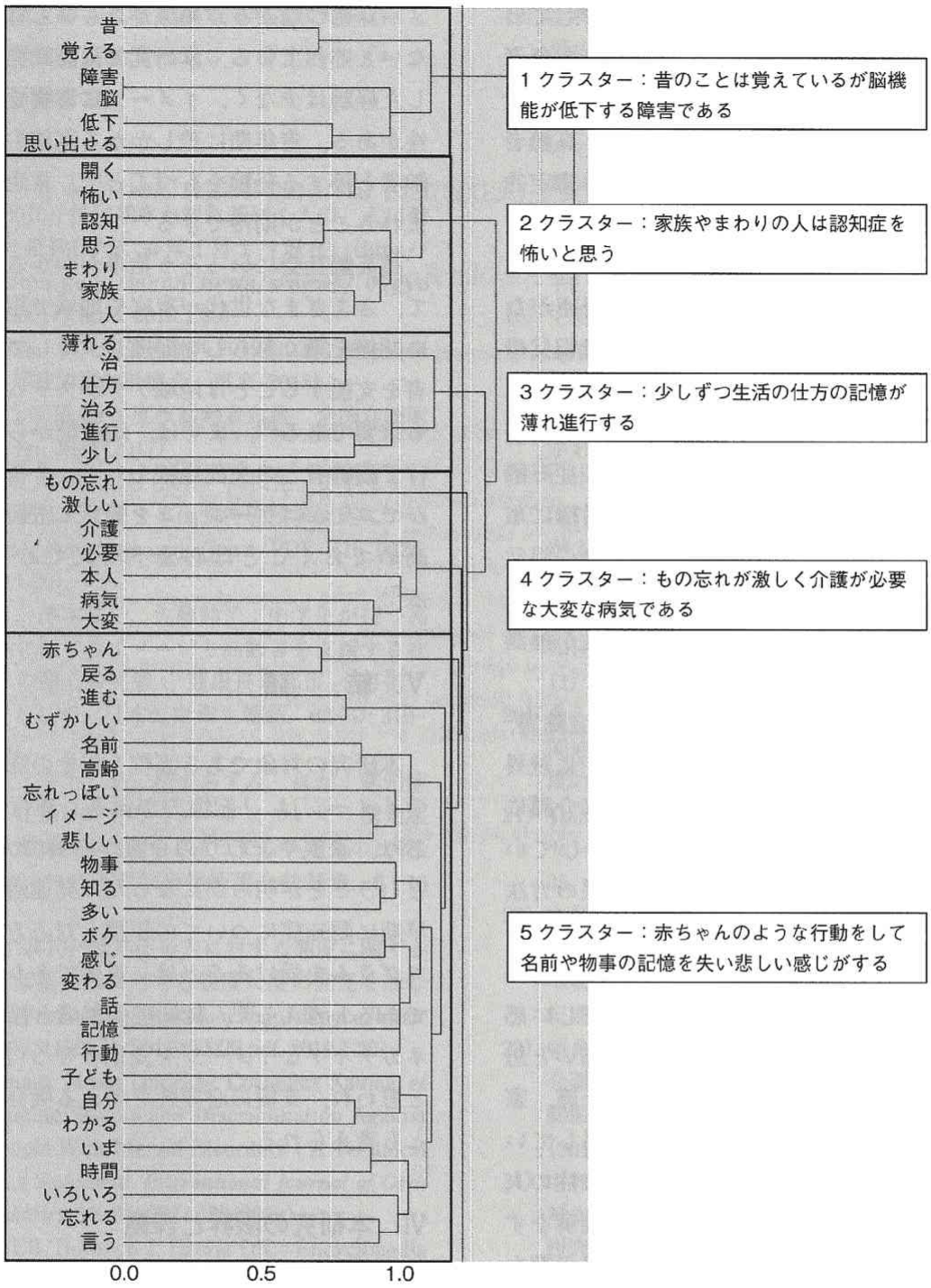

図 1　認知症高齢者のイメージの階層クラスター分析

2．高校生の認知症高齢者イメージについて

対象者は女子生徒が6割を占めていたが，樋口[10]，藤原ら[11]，本間[12]は，認知症高齢者のイメージに性差は影響がなかったと述べている．小山ら[5]，木下[14]の研究では，中学生や看護学生がもつ認知症高齢者のイメージは，場所がわからない見当識障害や食事のつくり方がわからない記憶力障害と，それらに伴う生活機能低下もイメージしていたと報告している．本研究の抽出語では，「忘れる，もの忘れ」など認知症の中核症状を示す語

句が多く，とくに記憶障害を強くイメージしていることが認められた．先行研究と比較して対象者の年齢は若干異なるものの，ほぼ同様の結果であったといえる．馬場ら[15]，中野ら[16]は，高齢者と交流を多くもつ人は活動能力や身体面を肯定的にとらえていたと述べている．しかし，奥村ら[17]，島崎ら[6]によると，認知症高齢者のイメージは祖父母や認知症高齢者との同居に関連がなかったと指摘している．本研究の対象者は祖父母との同居が3割であり，高齢者とのふれ合いはほぼ全員ありと回答していたが，認知症高齢者と接した体験がある人はわずかであった．認知症高齢者のイメージは，先行研究[15,18,19]とほぼ同様にネガティブなものが多かった．対象者は自身の祖父母が今後罹患する可能性があるとは考えにくく，現実的な問題としてとらえていない可能性が推測された．

大学生を対象とした研究[18,19]では，記憶障害，悲しいなどであり，本研究結果のイメージに差異は認められなかった．認知症の症状や家族介護についてマスメディアからの情報が影響している[11,20]と考えられ，本研究においても同様の方法で得た情報を，ネガティブなイメージとしてとらえた側面があると考えられる．クラスター分析の結果では，「行動や時間の記憶を忘れ，悲しい感じがする」「家族やまわりの人は認知症を怖いと思う」「介護は必要だが大変」など，症状や介護，家族の思いが認められた．Kitwood[21]の提唱しているパーソン・センタード・ケアでは，認知症の人の気持ちや立場を理解することで共感的理解をすることが可能となると述べている[22,23]．青年期もしくはそれ以前の時期に，認知症は疾患であることや対応方法の正しい知識を学ぶことで，認知症高齢者のイメージは変化すると考える[19,22]．中村ら[24]の看護学生を対象とした研究では，「優しい」という肯定的イメージが示されていた．認知症高齢者への理解は，「認知症高齢者問題への関心」や「接する経験」が関連している[17]．西山ら[25]は，認知症の症状や接し方の知識があれば肯定的なイメージにつながり，知識が乏しいと肯定的にならないと述べている．本研究では認知症高齢者と接した経験は少なく，イメージに影響を与えた可能性がある．青年期に差しかかる高校生が認知症高齢者と接する経験をもつことで，肯定的感情が生まれることが期待できる[18]．

超高齢社会にいっそう拍車がかかる今後に向けて，さまざまな世代が家庭や地域で相互によりよい関係を築く暮らしを促進し，そして認知症高齢者を支援することは地域ケアシステムの観点からも重要である[26]．まずは，幼少期から思春期にかけて高齢者との交流経験をもち，多様な活動のなかでコミュニケーションを通して主観的親密感を高めておくことは必要不可欠であると思われる[27]．

V．結　語

本研究の対象である高校1年生の認知症高齢者のイメージは，「記憶力が低下し進行する病気であり，家族やまわりの介護が必要で大変である」ということが明らかになった．発達過程において早期に認知症についての知識と対応方法の教育プログラムを受けることは，重要であり早急の課題であると考える[28]．認知症高齢者と接する体験でネガティブなイメージを変化させる可能性があると思われ，支援の必要性を考える機会となりうるとも考えられる．

Ⅵ．本研究の限界と課題

本研究は，A市の公立B高等学校に在籍する高校1年生のみを対象としたものであり，限られた対象による結果を考察したものにすぎず，回答にかたよりが生じた可能性がある．よって，本研究の結果を一般化することには慎重を要する．今後は，対象者数を増やすことや認知症の知識の詳細との関連を精査する必要がある．そのうえで，経時的な認知症高齢者のイメージ変化の検討や体

系的な調査が求められる．単なる知識の普及にとどまらず，認知症高齢者に対する肯定的イメージの涵養が重要である．

【文　献】

1) 総務省(2018)「住民基本台帳に基づく人口，人口動態及び世帯数(平成30年1月1日現在)」(http://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/ 01gyosei02_02000177.html, 2019.1.20).
2) 厚生労働省：国民衛生の動向2019/2020；厚生の指標増刊．厚生労働統計協会．東京(2018).
3) 内閣府：平成29年度版高齢者白書．全国官報販売協同組合，東京(2017).
4) 小野薬品工業株式会社(2015)「高校生・中学生を対象とした認知症に関する出張特別授業実施について」(https://www.ono.co.jp/jpnw/PDF/n15_0326.pdf, 2019.1.20).
5) 小山晶子，濱本洋子，佐藤鈴子：中学生が持つ高齢者生活に関するイメージと高齢者を支援する社会資源への関心の実態；「健康長寿都市」を目指すS市を例として．日本公衆衛生雑誌，**63**(6): 310-318(2016).
6) 島崎朱里，井上し乃，松上あすみ，ほか：認知症高齢者の症状に対するイメージについて；認知症高齢者を家族にもつ学生とそうでない学生の比較．ヒューマンケア研究学会学術集会抄録集，**6**: 16(2014).
7) 金　高闇(2010)「認知症の人に対する態度に関する研究；認知症の人に対する態度尺度の開発を通して」(http://repository.osakafu-u.ac.jp/dspace/bitstream/10466/11580/1/2011900020.pdf, 2019.1.20).
8) Nori Graham, James Lindesay, Cornelius Katona, et al.：Reducing Stigma and Discrimination Against Older People With Mental Disorders；A Technical Consensus Statement. *International Journal of Geriatric Psychiatry*, **18**(8): 670-678(2003).
9) Palmore EB, Buranch I, Harris DK：Encyclopedia of Ageism. 235-242, Haworth Pastoral Press, New York(2005).
10) 樋口耕一：社会調査のための計量テキスト分析；内容分析の継承と発展を目指して．23-56，ナカニシヤ出版，東京(2014).
11) 藤原和彦，小松洋平，奥永盛太，ほか：高校生における認知症の知識と態度に関する予備的研究．医学と生物学，**157**(6): 1101-1106(2013).
12) 本間　昭：地域住民を対象とした老年期痴呆に関する意識調査．老年社会科学，**23**(3): 340-351(2006)
13) 小林尚司，木村典子，神谷智子，ほか：三好町住民の認知症に関する知識と不安．日本赤十字豊田看護大学紀要，**4**(1): 21-27(2009).
14) 木下香織：「認知症の高齢者のケア」授業前後における看護学生の認知症の高齢者イメージの変化．新見公立大学紀要，**37**: 35-40(2016).
15) 馬場純子，中野いく子，冷水　豊，ほか：中学生の老人観；老人観スケールによる測定．社会老年学，**38**: 3-12(1993).
16) 中野いく子，冷水　豊，中谷陽明，ほか：小学生と中学生の老人イメージ；SD法による測定と比較．社会老年学，**39**: 11-22(1994).
17) 奥村由美子，谷向　知，久世淳子：高齢者とのかかわり度合いによる痴呆性高齢者のイメージの違いについて．老年社会科学，**24**(2): 262(2002).
18) 木村典子，青木　葵，石川幸生：認知症啓発教育が大学生の認知症高齢者のイメージに及ぼす効果．東邦学誌，**43**(1): 141-152(2014).
19) 木村典子，石川幸生，青木　葵：大学生の抱く認知症高齢者のイメージと関連要因．東邦学誌，**42**(1): 75-87(2013).
20) 金　高闇，黒田研二：認知症の人に対する態度に関連する要因；認知症に関する態度尺度と知識尺度の作成．社会医学研究，**28**(1): 43-55(2011).
21) Tom Kitwood(高橋誠一訳)：認知症のパーソン・センタード・ケア；新しいケアへの文化へ．13-35，筒井書房，東京(2006).
22) 木村典子：一般住民の身近に認知症高齢者がいた場合の対応に関する意識，認知症についての知識・不安との関係．愛知学泉大学・愛知学泉短期大学紀要，**43**: 89-94(2008).
23) 朝倉和子，西口　守，千葉一博：中高生の高齢者介護・福祉分野へのイメージと社会貢献意識との関係性の研究．東京家政学院大学紀要，**56**: 13-25(2016).
24) 中村勝喜，高木初子：看護学生の認知症高齢者に対するイメージと影響要因の文献検討．聖徳大学研究紀要，**48**: 93-99(2015).
25) 西山沙百合，荒井佐和子，瀧川真也：認知症の症状および介護に関する知識と認知症高齢者イメージとの関連．川崎医療福祉学会誌，**28**(1): 231-239(2018).
26) 久松信夫：地域包括ケアシステムにおける認知症高齢者の支援．老年社会科学，**39**(4): 434-442(2018).
27) 村山　陽：高齢者との交流が子どもに及ぼす影響．社会心理学研究，**25**(1): 1-10(2009).
28) Vernooij-Dassen MJ, Moniz-Cook ED, Woods RT, et

al. : Factors affecting timely recognition and diagnosis of dementia across Europe ; from awareness tostigma. *International Journal of Geriatric Psychiatry*, **20**(4): 377–386(2005).

Images of elderly people with dementia among high school students

Hiromi Kimura, Kayoko Koga, Midori Nishio

Fukuoka University of Medicine

The study aims to clarify images of the elderly with dementia among high school students. A questionnaire survey was conducted for first-year high school students. We had the students write images of elderly person with dementia in words. The analysis method used KH Coder of text mining software. This study was approved by the C University Ethics Committee. Questionnaire contents were explained to the subjects, and the data was screened for leakage of personal information. The study recruited 199 participants, of whom 77 were male and 122 were female. A total of 2194 extracted words were further reduced to 393 words. The extracted words were : Forget, forgetfulness, hard, memory, illness. In the cluster analysis, five clusters were extracted. The image of elderly people with dementia among high school students was "a serious illness in which memory ability declined due to brain function disorder and nursing was necessary". It was suggested that high school students are expected to have the opportunity to think about image changes and the need for support.

Key words : High school student, Image of elderly people with dementia, Negative image